

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

Division D1:第2回ジャーナル

“プリンの幸せ”

Written by 内藤明亜



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

●プリンの幸せ

神社で見つけた謎な駄菓子屋さん。その店先には、こんな張り紙がしてあった。

この子を探してください。迷子です。
この子を見つけてくださった方に、お礼差し上げます。

迷い幻獣の捜索願いである。

「ハビネス・プリン、マンドラゴラ、シルウス、それにクリムスタンかぁ。いろいろな種類の幻獣が迷子になっているよね」

張り紙に添えられた幻獣のイラストをしげしげと見つめて香織が言った。

「香織さんも一緒に探しませんか？」

達彦がさりげなく誘いをかける。

「え？ 私達が？」

「面白い物が見つかるかも知れませんか？一緒に探しましょう」

「そうね。私達も探してみようかしら。それで、どの幻獣を探すの？」

「ハビネス・プリンを探しましょう。その前に、ハビネス・プリンの特性や修正を聞いておきたいところですが」

言って、駄菓子屋のお姉さんの顔にさりげなく目を向ける。

「え？ ハビネス・プリンの特性に修正？」

と言われてもなあ。ハビネス・プリンって言ったら甘い息とネパネパで攻撃してくることくらいしか知らないしい～。それに私は甘い物が苦手で、あのダダ甘い匂いのことを考えただけで頭がクラクラしてくるしい～。そうだ、あれがあったわ！」

お姉さんは店のコタツに潜り込むと、何やらゴソゴソやり始めた。

ガゴ！ ギゴ！ ガゴゴ！ キュイ！ キキキキキキキキ バタン！

一連の物音が続いた後で、急に静かになった。しかしこのコタツの中は何がどうなっているんだ？ しばらくすると、再びコタツの中から物音が聞こえてきた。

バタン！ ギギギギギ！ ガゴゴゴゴ！

そして駄菓子屋のお姉さんが再びコタツの中からぬうっと姿を現した。その手にメモ帳サイズの小さな本が握られている。

「やっぱりハビネス・プリンのことは、ハビネス・プリンに聞くのが一番！ というわけで、

絶対に役に立つアイテムをプレゼントするわ！」

お姉さんはその小さな本を香織に手渡した。本の題名を見ると、こう欠いてある。

『ハビネス・プリン語初級会話』

「え？ プリンの言葉が分かるんですか？」

とまどいがちに香織が本のページを繰って、中身に目を通す。

【基本単語】

ぶるん：プリン ぶるうん：サクランボ

ぼよん：カaramelシロップ

ぶるぶるうん：お菓子屋さん

ぶる～ん：甘い ぶる～ん：とっても甘い

ぶるぶる～ん：だだ甘い

ぶるぶるぶるぶる～ん：めちゃくちゃ甘い

以下略

【基礎会話】

ぶるうん：おはようございます

ぶるん：こんにちわ

ぶるうん：こんばんわ

ぶる～ん：おやすみなさい

ぶるんぶるん：ありがとう

ぼよよお～ん：ごめんなさい

以下略

万事がこんな感じで記されている。香織はため息一つついてページを閉じた。

「こんなん、役に立つのかしら？」

「まあ、持っていれば何かの役には立つでしょう。ところで、魔法解除のお菓子なんてありませんかね？」

達彦が駄菓子屋のお姉さんに訊ねる。

「効果が持続する魔法を解除する手段は、持ち合わせていませんから。できれば美味しい物が好みです」

「魔法解除のお菓子が」

お姉さんは店先に並んだビンの一つをつかみ、手の平の上でひっくりかえす。ビンの中から銀紙にくるまれた丸いお菓子が、一個だけぼろりと転がり出た。

「あれ？ とうとう最後の一個になっちゃったのね。問屋さんに注文しなきゃ。とりあえず、これを渡しておくわ。お望み通り、魔法解除の効果を持ったお菓子よ。ああ、それからその銀紙は使う直前まで破かないでね」

達彦がお菓子の匂いをかぐと、銀紙の内側か

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

らはかすかなハッカの匂いが漂っていた。

「だけど、こんなので本当にプリンと話が出るようになるのかなぁ」

駄菓子屋でもらった本を何度も見ながら、香織は小首をかしげている。

しかし香織には、こんなプリン語の参考書なんぞよりもずっと頼りになりそうな助っ人がついていた。バスターの南かるま君である。

「ハビネス・プリンを探しているんだってね？ 俺も手伝ってやるよ」

「ありがとう！ 私、困ってたところなの」

「で、相手はプリンだね？ まずは足跡と言うか、移動した後を調べてみよう。どうやらネバネバしているようだし、痕跡が残っているかもしれないよ」

「分かったわ。ネバネバした跡ね」

「後は、普通のプリンを仲間と勘違いしている可能性も 無いかもしれないけれど、一応探してみよう」

「それじゃ、商店街のお菓子屋さんから当たってみましょうか」

まずは一軒目。

「ここは和菓子専門店ね」

店のガラスケースの中には美味しそうなおまんじゅうや羊羹が並んでいる。

「いや、ここはやめておこう」

「どうしたの、かるま君？ なんだか顔色すぐれないわよ」

「俺、和菓子は嫌いなんだ」

「そうね。だったらやめておくわ。それになんとなく、このお店はハビネス・プリンに似合わないような気がするし」

二軒目は大衆的な洋菓子店。いかにも下町のお菓子屋さんといったお店で、値段もそこそこにリーズナブル。

「ねえ、これを見て！」

香織が店の入り口を指さす。何か濡れた物体を引きずったような跡。そしてところどころに茶色い塊がこびりついている。

南かるまは濡れた跡に顔を近づけ、クンクンと匂いをかぐ。

「間違いない。これはプリンの匂いだよ」

そして、茶色い塊を指になすりつけ、その指を口に持って行って慎重に味見する。

「間違いない。これはプリンにかけられたカラメルシロップだ。しかも、かすかなサクランボ

の匂いまでついている」

「すごいわ、かるま君！ そこまで突き止めるなんて！ あの、訊いてもいい？」

「何だい？」

「もしかして、かるま君プリンが大好物なの？」

「いいや、一番の好物はクレープさ。三食全てがクレープでも良いと思っているんだ」

三軒目は商店街でも指折りの高級洋菓子店。芸術品とみまがうような高級ケーキの数々が、ガラスケースの中で甘い輝きを放っている。

「見てごらん。プリンの這った跡がすごく濃いだろう？ きっとハビネス・プリンはこの店の周りを何度も何度も這い回ったんだ。意外とグルメなんだな」

「あれを見て、かるま君！」

香織が叫んで歩道を指さす。そこには野良猫が大の字に伸びて気絶していた。しかもネコの全身、茶色いカラメルシロップだらけ。かるまは野良猫に鼻を近づけ、そしてウツウツとなって顔をしかめた。

「間違いないよ。このネコはハビネス・プリンに攻撃されたんだ。それにしても、なんて凄まじいプリンの匂いなんだ。いくら俺でも、この地獄のような甘さにはクラクラする」

「もしかして、ハビネス・プリンはまだこのあたりにいるの？」

「とにかく、この跡を辿っていけば間違いなくハビネス・プリンと出会えるはずだよ」

さらに跡を辿って先へ先へと進み、とある住宅街までやってきた時、道を一人の子どもが通りかかった。かるまは子どもに尋ねた。

「君、このへんでチェリーの付いたプリンが道を歩いているのを見なかったかい？」

「そのプリンなら、あのお家のお姉ちゃんの後にくっついて、お家の中へ入っていったよ」

子どもはきょとんとした顔で、一軒の家を指さす。その家を見て、香織の顔色が変わった。

「かるま君 私、あの家知ってるよ」

「知ってるって、友達の家かい？」

「違う。私のとっても苦手な人よ」

そのゴージャスなお家の中には、甘い匂いが立ちこめていた。キッチンのテーブルに並ぶのは、みな選りすぐられた高級食材。タマゴにバターにお砂糖に小麦粉に数々のフレイバー。そして、街の高級店でわざわざ買ってきた、クッキー専用のナッツにドライフルーツにチョコレール

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

ト。そしてキッチンの主、戸塚泉の甘美な時間が今日も始まろうとしていた。愛用のボールと泡立て器と軽量カップの準備はOK。オープン皿にはバターを塗って、と。

「毎日、お菓子作りしているとほんとに楽しいわ。さあ、今日はチョコチップ・クッキーから始めちゃおうかな？」

突然、熱波のようなただ甘い匂いが泉の体を包み込んだ。

「え？ 何よこの匂いは？ これって、プリンの匂いじゃないの？」

ふと、テーブルの下に目をやる。そして、そいつと目が合ってしまった。サ克蘭ボを付けた巨大なプリン。それが、このただ甘い匂いの発生源だったのだ。

「

」

泉は絶句。その目が点になる。

「ぶるん！」

巨大プリンが言葉を放った。

確かに、プリンはそう言ったのだ。

思わず、泉は叫んでいた。

「なんなのよおこれえ〜っ!？」

● 次回選択肢

ア：ハビネスプリンゲットだぜ

イ：他の幻獣を探す

その他